

バタフライ・エフェクト

2005(平成17)年5月15日鑑賞心齋橋パラダイスクエア

★★★



監督・脚本＝エリック・ブレス、J・マッキー・グラバー／出演＝アシュトン・カッチャー／エイミー・スマート／エルデン・ヘンソン／ウィリアム・リー・スコット／ジョン・パトリック・アメドリン／アイリーン・ゴロヴァイア／ケヴィン・G・シュミット／ジェシー・ジェームズ／ローガン・ラーマン／サラ・ウイドウズ／ジェイク・ケーゼ／キャメロン・ブライト／メローラ・ウォルターズ／エリック・ストルツ／カラム・キース・レニー／ロレーナ・ゲイル／イーサン・サブリー／ケヴィン・デュランド（アートポート配給／2003年アメリカ映画／114分）

……この映画のタイトルである「バタフライ効果」とは、「ある場所で蝶が羽ばたくと、地球の反対側で竜巻が起こる」という有名な「カオス理論」。これは単なるSFの話なのかそれとも……？ もし自分のあるいは彼女のあの時の状況がちょっと変わっていたら……？ そんなことは誰もが1度は考えたことがあるはずだが、それは決してかなうことのない夢のお話。ところかもし……？ 少年時代や学生時代を思い出しながら、あなたも「もし○○だったら」と念じてみては……？ でも、それが楽しいことか悲しいことかは知らないよ……？

バタフライ・エフェクトとは？

「バタフライ・エフェクト」＝「蝶々効果」とは、「ある場所で蝶が羽ばたくと、地球の反対側で竜巻が起こる」という、はじめの条件のわずかな違いが、将来の結果に大きな差を生み出すという「カオス理論」のこと。パンフレットによれば、これはもともとSFの範疇での理論だったが、現在は量子物理学分野での「ヒモ理論」（タイムワープの空間が理論的には発生可能とされる仮説）において真剣に論議されているとのこと……。

世界において中国の占める位置や役割が次第に大きくなっている昨今、この「バタフライ効果」は、「北京で蝶が羽ばたくとニューヨークに嵐が起こる」とい

う形でしばしば使われているが……。

何とも不思議な映画……？

「もし、クレオパトラの鼻がもう少し低かったら」とよくいわれるように、歴史上の「If ……」は誰もが1度は考えたことがあるテーマ。その興味を前提に「タイムスリップ」というテクニクを使うと、そこにさまざまな小説や映画をつくり出すことができる。

中世ヨーロッパへタイムスリップしたのが『タイムライン』(03年)なら、日本の戦国時代にタイムスリップしたのが近々公開される『戦国自衛隊1549』。この映画はそんな大規模なタイムスリップではなく、7歳の時から書き続けてきた日記を読み返し、何かを念ずることによって簡単に(?)タイムスリップできるエヴァン(アシュトン・カッチャー)が主人公。そしてエヴァンの友人はトミー(ウィリアム・リー・スコット)とレニー(エルデン・ヘンソン)そしてトミーの妹のケイリー(エイミー・スマート)。

一癖も二癖もあるこの4人グループのそれぞれの生き方は、さてどれがホンモノでどれがニセモノ……？ 面白い視点から製作された映画であることはたしかだが、何とも不思議な映画……？

エヴァンの父親は？

7歳のエヴァンは母親のアンドレア(メローラ・ウォルターズ)の手ひとつで育てられていたため、いつも父親に会いたいという願望を持っていた。ところが、そんなエヴァンが学校で描いた1枚の絵は、先生や母親を驚愕させる、父親殺しの残忍な絵だった！ さらにエヴァンは、突然台所の包丁を手に母親に向かうことも……。ところがエヴァンは自分のそんな行動を全く覚えていない……。記憶が途切れることは、酒を飲みすぎた時や認知症(痴呆症)になればある意味で当然だが、発育盛りの7歳の男の子にそんな症状がでるのはコワイ……！

そんなエヴァンの父親も実は同じような症状で今は精神病院に……。病院内で、はじめて手錠をかけられた父親と監視員つきで、面会したエヴァンだったが……？

主役を演じるカッチャーは？

この映画は第一線級の俳優をそろえたわけではないが、主人公のエヴァンを演じるアシュトン・カッチャーは1978年生まれの若手で、ピープル誌の選出する「世界で最も美しい50人」の2003年度版ではレオナルド・ディカプリオを抑えてトップページを飾り、事実上男性のNo.1になったとのこと。しかし私はやっぱりディカプリオの方が圧倒的にハンサムだと思うが、さてあなたは……？

私の注目はキレイな女優

姿カタチがいろいろと変わるこの映画のようなストーリーでは、やっぱり見モノは美人女優！ 主人公エヴァンの変化がこの映画の本質だが、私の目はどうしてもそれよりも女優の方に……。この映画では、4人の仲間の1人で、変態気味の友人トミーの妹役のケイリーを演じるエイミー・スマートがその注目の的。エヴァンとベッドの中で戯れる幸せいっぱいの姿から、顔を傷つけられ1人貧しい売春宿で売春婦として過ごす姿まで、さまざまな姿を演じてくれるエイミー・スマートのサービス精神(?)に感謝……。

凶悪事件の続発に警告！

ここ数日日本国は、2005年4月25日に発生したJR 尼崎の事故に続いて、小林泰剛容疑者による18歳少女監禁事件の話題で騒然としている。報道によると、この小林容疑者は「監禁モノ」「調教モノ」を含むアダルトゲームソフトを多数所持していたとのことである。2005年5月16日の産経新聞のコラム産経抄は、『ローマの休日』(53年)で有名なウィリアム・ワイラー監督の『コレクター』(65年)を取り上げて、その「事件性」を対比していたが、今後の日本社会では、この少女監禁事件のような事件はいくらでも起きてくるような気がする。そんなコワイ時代状況になった背景には、もちろん教育の問題が大きいが、こんな映画が次々とつくられていることも1つの原因なのでは……？

そういう意味で映画やテレビの持つ影響力を、少し真面目に考えなければならぬと思うのだが……？

『デッドコースター』と『バタフライ・エフェクト』比較

この『バタフライ・エフェクト』の監督はエリック・ブレスとJ・マッキー・グラバーのコンビだが、この2人は『デッドコースター』(03年) (『シネマルーム3』232頁参照) の原案・脚本を書いたコンビとのこと。『デッドコースター』も、「死の予知能力」を持った主人公と「指定解除」ができるのか、という奇妙な設定の映画で、この『バタフライ・エフェクト』と多くの共通点がある。要するにこのコンビは、そのようなちょっと変わった設定が好きな2人ということだ。もっとも『デッドコースター』はハイウェイ上での大規模で派手な交通事故が見せ場だったが、この映画は数々の細かいストーリーのつくり替えがその持ち味。したがって当然ながら話は突然アッチコッチに飛んでいくし、全く異なった状況のもとで同じ人物が姿カタチを変えて登場してくるのでその理解は難しい。しかしそうだからこそ、あっと驚くスクリーン上の派手さではなく、人間の内面があれこれと描かれており、結構面白い……？

2005(平成17)年5月16日記

ミニコラム

消したい記憶と消したくない記憶

人間にはできれば消したいと思う恥ずかしい記憶があるもの。古いアルバムをめくれば思い出す、あのヘンなポーズの俺……？ 『エターナル・サンシャイン』や『ロング・エンゲージメント』そして『四日間の奇蹟』や『この胸いっぱいのお愛を』など最近やたら「人間の記憶」をテーマにした映画が増えている。これは、日本では少子高齢化が進む中、年金のあり方が大問題

になるとともに「認知症」の事例が増えてきたせい……？ 認知症の韓国版注目作は10月22日公開のそのものズバリのタイトル『私の頭の中の消シゴム』。もっとも、これは若年性の認知症だから、一層怖い涙々のラブストーリー。さてあなたにとって、消したい記憶と消したくない記憶とは……？

2005(平成17)年10月19日記